

オロチ語とウデヘ語の異同について

風間 伸次郎

1. はじめに

本稿は二つの部分よりなる。前半では、オロチ語の文法要素について、もっとも系統的に近いと考えられるウデヘ語との比較を行い、両者の異同を考える。後半では両言語の語彙要素の異同について検討する。

ウデヘ語に関しては、近年文法書や辞書が相次いで出版され、その研究が進展している。筆者も何度かの現地調査を通じてウデヘ語の特徴について把握できるようになってきた。他方オロチ語の研究資料は少なく、筆者も1995年に一度調査したのみである。したがって本稿ではウデヘ語を通して、オロチ語の特徴について考え、その系統的な位置づけを明らかにすることを目的とする。その際、まず音対応によってオロチ語の系統的な位置づけを確認した後に、文法要素および語彙要素の比較を行う。

なお2002年の統計によれば、オロチの人口は426人、うち話者は18人(4.2%)となっている。

2. 先行研究

先述したようにオロチ語の研究は非常に少ない。Tsintsius(1949)はこの言語の文法に関する最初の記述である。Avrorin and Lebedeva(1968)と Lebedeva(1997)は共にこの言語の文法概説である。Avrorin and Lebedeva(1966)は最初のテキスト集で、58の民話と伝説からなる。Avrorin and Lebedeva(1978)はテキストと語彙集、および民族学的情報からなる。語彙集は5,500項目を含み、テキストのジャンルは歌、謎々、生活に関する話などである。風間(1996)は現地調査の報告で、22のテキストと基礎語彙調査による語彙が収録されている。Avrorin and Boldyrev(2001)は近年出版された文法書である。本稿でとりあげた文法要素の諸形およびその用例はもっぱらこの Avrorin and Boldyrev(2001)による。

3. 音対応によるオロチ語の系統的な位置づけの確認

Ikegami(1974)によれば、主に音対応の面から、オロチ語はウデヘ語と共にII群に分類される。さらにII群には中国領に分布するヘジェ語が属するものと考えられる。な

お以下では()の略号を用いる。

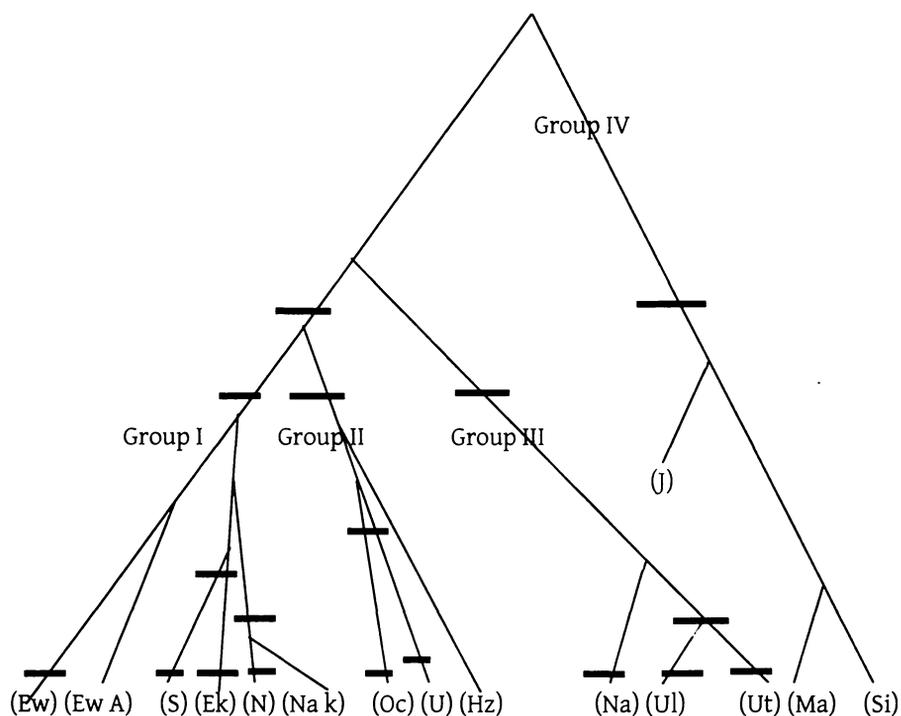
I 群 エウエン語(Ew), エウエンキー語(Ek), ソロン語(S), ネギダル語(N)

II 群 ウデヘ語(U), オロチ語(Oc)

III 群 ナーナイ語(Na), ウルチャ語(Ul), ウイルタ語(Ut)

IV 群 満州語(Ma), 女真語(j)

ツングース諸語の歴史的分岐について、筆者は下記のような過程を推定している。すなわち、オロチ語とウデヘ語はII群に属するものと考えている。



(Ew A): エウエン語アルマン方言, (Na k): ナーナイ語クル・ウルミ方言, (Si): シベ語,
太線は音変化を示す

上記の系統図及びその根拠である音対応に関して、詳しくは、Kazama (2003) も参照されたい。

すなわち、まず III 群の言語が分岐し、しかるのちに I 群と II 群の言語が分岐したとするものである (IV 群はさらに前に分岐したものと考えられるが、この点についてはなお検討を要する)。なお、共時的な分類と通時的な分岐のグループは別に考えるべきものかもしれないが、ここでは便宜上同じグループ名を用いることにする。

以上のような仮定の根拠である音対応の例を示せば、以下の如くである。

まず、オロチ語は I, II 群の言語に共通した特徴を示す。

#p- > #x- : Oc *xokto* 「道」 || U *xokto* || Ek *xokto* || Na *pokto*

#x- > #ø- : Oc *adin* 「風」 || U *adin* || Ek *adin* || Na *xədun*.

-p- > -w- : Oc *ǰawa-* 「つかむ」 || U *ǰawa-* || Ek *ǰawa-* || Na *ǰapa-*.

-mb- > -m-, -nd- > -n-, -ŋg- > -ŋ- (同一調音点における鼻音と破裂音の連続からの破裂音の脱落) : Oc *inaki* 「犬」 || U *ina'i* || Ek *ɲinakin* || Na *inda*, Oc *saŋa* 「穴」 || U *saŋa* || Ek *saŋaar* || Na *saŋgar*.

-md- > -mn-, -ŋd- > -ŋn- (順行同化 (鼻音化)) :

Oc *kamnu* 「糊」 || U *kamnu* || Ek *kamnun* || Na *kamdon*,

Oc *toŋno* 「まっすぐな」 || Ek *toŋno* || Na *toŋdo*.

u > i : Oc *tigdə* 「雨」 || U *tigdə* || Ek *tigdə* || Na *tugdə*.

ただし次のように II 群と III 群に対して I 群の言語が対立した形を示す対応もある。これらは唇音と軟口蓋音におけるメタセシスである。メタセシスは往々にして散発的に発生するものであるため、ここでは分岐の後にある場所で発生したものが広まったものとする。

-pk- > -kp- (オロチ語では逆行同化により > -pp-), -bg- > -gb- (同じくオロチ語で > -bb-), -mŋ- > -ŋm- (オロチ語で > -mm-) :

Oc *jappu(n)* 「8」 || U *ǰakpu(n)* || Ek. *ǰapkun*, || Na. Bk (ナーナイ語ビキン方言) *ǰafkon*,

Oc *subbu* 「魚皮」 || U *sugbu* || N *sobgu* || NaBk *sobgo*,

Oc *amma* 「口」 || U *aŋma* || Ek. *amŋa* || NaBk. *amga* || Na *aŋma*.

次にみるのが、II 群の言語に特徴的な形を示す音対応である。

-ms- > -ms- : Oc *giamsa* 「骨」 || U *giamsa* || Hz. *giamsa* || Ek *giramna* || Ul. *giramsa*

-ns- > -s-: Oc *nasa* 「皮」 || U *ñaa* (< **naha* < *nasa*) || Hz. *nasa* || Ek *nanna* || Na *nanta*.
-ps- > -p-: Oc *aapin-* 「横になる」 || Hz. *afine-* || Ek *aasin-* || Na *apsin-*.

以下は II 群の言語が散発的に特徴的な形を示す語例である。

Oc *asa* 「女」 || U *aanta* (< **asa-nta*) || Hz. *asa(n)* || Na *asi* || Ek *asii*;
Oc *xitə* 「子供」 || U *sitə* || Hz. *sitə* || Na *piktə* || Ek *xutə*.

以下はオロチ語とウデヘ語のみに共有されている特徴を示す音対応である。

-lt- > -kt-, -ld- > -gd-, -lk- > -kk-, -lg- > -gg-, -lb- > -gb- > -bb- (音節末の -l の衰退):
Oc *kakta-* 「割る」 || U *kakta'a* || Ek *kaltaka* || Na *kaltaa*,
Oc *doogdi-* 「聞く」 || U *dogdi-* || Ek *dooldii-* || Na *doolji-*,
Oc *sikki-* 「洗う」 || U *siki-* || Ek *silki-* || Na *silko-*,
Oc *diggan(a)-* 「言う」 || U *digan(a)-* || Ek *dilgan* 「声」 || Na *dilgan* 「声」
Oc *dobbo* 「夜」 || U *dogbo* || Ek *dolbo* || Na *dolbo*.

-rk- > -kk-, -rg- > -gg-, -rŋ- > -ŋŋ- (音節末の -r の衰退):
Oc *ukkə* 「ドア」 || U *ukə* || Ek *urkə* || Na *uikə*,
Oc *iggi* 「尻尾」 || U *igi* || Ek *irgi* || Na *xuigu*,
Oc *xəŋŋə(n)* 「膝」 || U *xəŋə* || Ek *xəŋŋən* || Na *pəiŋən* || Hz. *xəŋŋən*.

-rd- > -gd-, -rp- > -kp- > -pp-, -rb- > -gb- > -bb-, -rm- > -ŋm- > -mm- (音節末の -r の衰退):
Oc *əgdəŋŋə* 「不思議な, おもしろい」 || U *əgdəŋŋə* || Na *ərdəŋŋə*,
Oc *gappa-* 「撃つ」 || U *gakpa-* || Hz. *gabta-* || Ek *garpa-* || Na *garpa-*,
Oc *gəbbi* 「名前」 || U *gəgbi* || Hz. *gərbi* || Ek *gərbii* || Na *gərbu*,
Oc *immə* 「針」 || U *iŋmə* || Ek *inmə* || Na *xurmə*.

-mk- > -mp-, -mg- > -mŋ- > -ŋm- > -mm-:
Oc *simpi-* 「せきをする」 || U *simpi-* || Hz *simki-* || Ek *simki-* || Na *siŋbisi-* || Ut *siikpi-*,
Oc *ommo-* 「忘れる」 'to forget' || U *oŋmo-* || Hz *omŋo-* || Ek *omŋo-* || Na *oŋbo-*.

-pt- > -t-: Oc *datta~data* 「河口」 || U *data* || Ek *daptun* || Na *daa*.

次の対応はオロチ語のみ独自の形を示すものである。

-ls- > -kt-: Oc *xukta* 「毛布」 || U *xula* (< **xulaha* < **xulsa*) || Hz *xulsa* || Ek *xulla* || Na *polta*.

母音間における -r- の脱落がオロチ語とウデヘ語、さらに I 群のネギダル語において起こった。このことは池上 (1989) が言うように、これらの言語がかつて連続して分布していたことに起因するのかもしれない。さらにその地域にあった基層言語の影響も考えられる。ただし、三言語における -r- の痕跡はそれぞれの言語で若干振る舞いが異なっていることにも注意する必要がある。

-r- > -∅-:

Oc *daama* 「背中」 || U *daama* || N *dayama* || Ek *darama*,

Oc *goo* 「遠い」 || U *goo* || N *goyo* || Ek *goro*,

Oc *uaə(n)~uwəə(n)* 「丘, 山」 || U *ua(n)* || N *uyəə* || Na *xurəən*.

母音間の -r- の脱落の結果、ネギダル語とウデヘ語では音素 /r/ が消滅した。これに対してオロチ語ではある程度の語に r が認められる (風間 1996 参照)。これは III 群の言語であるナーナイ語、もしくはウルチャ語から再度借用したものと考えられる。

オロチ語には歴史的に III 群の言語であるナーナイ語、もしくはウルチャ語から強い影響が及んだものと考えられ、このことがこの言語の位置づけを難しいものになっている。

4. ウデヘ語とオロチ語の文法要素に関する比較対照

4.1. ウデヘ語とオロチ語で共通する要素

以下ではオロチ語とウデヘ語に共通する文法要素を抜き出してみた。I 群や III 群など、他のツングース諸語にも広く見られるものははずしてある。他の言語にも対応する形式は存在するが、両言語のみが類似し、かつ他の言語群とは異なった形式を持っているものは取り上げた。すなわちこれらの文法的要素は II 群の言語 (オロチ語, ウデヘ語) に特徴的な要素ということができる。

表 1: ウデヘ語とオロチ語に共通する文法的要素

	オロチ語	ウデヘ語	他の言語における参照形など
例外的な複数形	-nta	-nta	
形容詞や形動詞につく複数	-gatu	-gatu	
集合複数	-jika	-jiga	Na -joan (<*-jokaan)
「～(する) 道具」	-ŋki	-ŋku	
フィラー	aŋi	aŋi	Na xai, Ut anu,
形容詞強調形	-ŋku	-aŋku	
「～持ちの」	-ki	-xi	Na -ko Ek -lkaan, -či
長母音語幹につく現在形動詞形	-i	-i	Na -rii
未来形動詞	-jaŋa	-jaŋa	Na -
継続副動詞	-mdia	-mdi	Ul -mdee
目的副動詞	-(a)la(k)a-	-laga-	Na -(po)go-
遠過去副動詞	-ŋasa-	-ŋia-	Na -
「～だけ, ～のみ」	=baki~=maaki	=mæi	Na =ragdaa (=baki)
断定の小辞	=gini	=gini	Na =goani

この他に、文法的な類似に関して気づいたことを2点、あげておく。三人称複数の代名詞といわれている nuati は、-ti の部分が本来三人称複数の人称接辞であり、これと語幹の間に格を示す接尾辞が現れるのが本来の形であったと考えられる（ナーナイ語などは現在でもそうである）。しかしオロチ、ウデへの両言語では、ti の後に格接辞がつくようだ。ただし、ウデヘ語におけるこの語の使用頻度はかなり低い。

「5」を示す数詞 tuŋa の対格形は Avrorin and Lebedeva(1978)によれば tuŋa-ma と-ma のついた形である。筆者の調査によれば、ウデヘ語でも同様である。音対応から見て、この語は本来語末に n の音を持たないので、対格が -ma で現れるはずはない。これは「3」や「4」が本来的に語末の n を持っていたため対格に -ma が現れる((U) ila-ma, dii-ma) ことからの類推によって生じた形であろう。これもオロチ語とウデヘ語の両言語にのみ観察されることのようなのである。

4.2. ウデヘ語とオロチ語で一致しない要素

前節でみたように、ある程度の文法要素はⅡ群の両言語に特徴的なものとして存在していると言えそうである。しかし他方で、オロチ語とウデヘ語の間で一致しない要素も多く存在する。ここではそれを見てゆく。

表 2: ウデヘ語とオロチ語の間で対応しない文法的要素

	オロチ語	ウデヘ語	他の言語の参照形
奪格	-dui	-digi	
再帰人称複数	-baji~bbaji	-fi	
複数形	-sa(g)	—	
近似複数	-ja	—	
指小辞	-ka(n)	-jiga	
軽蔑形	-misa		エウエン語 -mija
「～する人」	-mdi	—	
「亡～」(亡くなった人名 や親族名称につく接辞)	-ŋasa	-sini	
「～用の網」	-magda	—	
「～の皮」	-ksa	—	Na 他
一人称複数包括形	biti	Minti	Ⅲ群は無し
「～日間」	-kta	—	Na -lta
形容詞比較級	-laa	—	Na -laa
「～の方向」	baiti	—	Na baaroani
非人称形動詞否定形	-wasi	—	Na -wasi
先行副動詞	-jaa/-daa/-aa/-taa	-asi	Na -raa
条件副動詞	単数 -wi 複数 -wisa	-(l)isi-	Na 単数 -pi 複数 -paari
提題・対比の小辞	=tanii	=tənə	Na =tanii
(特に未来形の) 述語の 強調小辞	=ma	—	Na =ma

表に示したように、オロチ語にあってウデヘ語にないものは、ナーナイ語をはじめとする III 群の言語にその対応要素が見出される。したがってここでも III 群の言語からオロチ語への強い影響をみることができる。

5. ウデヘ語とオロチ語の語彙要素に関する比較対照

オロチ語の語彙集として唯一のものである Avrorin and Lebedeva (1978)のオロチ語の単語を検討した。音対応についてはすでに見たので、今回はオロチ語とウデヘ語だけが他の言語とは語源的に異なる語彙を用いている例を重点的に探すことにした。すなわち、まずオロチ語の単語でウデヘ語の単語とは対応するが、他の I 群や III 群の言語に対応する単語が見られないものを探した。他の群の言語に対応する語が無いかどうかは、Tsintsius i dr. (1975, 1977)によって確認した。なお他の言語群に音対応を示す語が存在している場合でも、他の言語群での存在がまれであり、問題の二言語のみが説明のつかないような不規則な形を示している場合には、それも取り上げることにした。

5.1. オロチ語とウデヘ語に固有な語彙

このような語は大量にあるものと考えていたが、予想に反して少なかった（もちろん筆者の力不足から、網羅的に抜き出せたとは言えないので、その点に問題はある）。ウデヘ語には他のツングース諸語に同語源のものが見られない語が多くあると考えられるが、それらの多くにオロチ語に対応する語が無いということになる。ウデヘ語におけるこうした語の一部は漢語起源と考えられるが、由来の不明な語もまだ多く残ることが予想される。

表 3: オロチ語とウデヘ語に特徴的な語彙

意味	オロチ語	ウデヘ語	I 群や II 群における対応する意味の語
削るための先の曲がったナイフ	appili	afili	(Na) giasoo
女性（一般）	asanta	aanta	(Na) asi naisal (Ek) asal
ベリー類	gəbbəŋku	gəgbəŋku	(Na) amtaka (Ek) jiktə

オロチ語とウデヘ語の異同について

話す	diggana-	diana-	同語源の語 (Na)dilgan は「声」の意. (N) dilgan-にのみ「話す」の意味あり
飛ぶ	dəili-	diəli-	(Na) dəgdə- (Ek) dəgǰə-
休む	dəmpučī-	dəmpu-	(Na) təin- (Ek) dəruumkiičə-
倉	ǰali	ǰali	(Na) takto (Ek) nəəku
残す	imənə-	imənə-	(Na) dərəǰigu- (Ek) əməən-
夏用の白樺樹皮製の小屋	kawa(n)	kawa	
梃子による皮なめし具	kakə	kaiŋku	(Na) gəǰikuu / gəǰi
碗	moko	moxo	(Ew) məəkəkək (Na) muksu
考える	məiči-	məisi-	(Ek) mərgə- (Na) murči-
去る	ŋəi-	ŋəni-	(Ek) ŋənə- 「行く, 動く」
霊	omæ	omio	(Ek) oomii, (N) omi
河	uli	uli 「川, 水」	(Ma) ula 「大河」
自動弓式の罨	səmmi	səŋmi	(N) sənmu (Na) sərmi
マガモ	taumia	taumia	(Ek) tarmii 「雄ガモ」 (Na) tarmi 「雄ガモ」
服	təggə	təgə	(Ek) tətii (Na) tətuə
飢える	lali-	lali-	(Na) lal- 「痩せる」 (Ut) lalu- 「飢える」

上記の語彙の多くは基礎語彙と見做せるものであって、借用によるものではないと考えたい。したがって II 群の言語が、他の群から分岐した後に、この群の言語が独自に獲得した、もしくは独自の音変化を起こした語彙とみなすことができる（さらに、II 群のみが祖語からの語形を保持している、という場合も考えられる）。ただし、「削るための先の曲がったナイフ」、「倉」、「夏用の白樺樹皮製の小屋」、「梃子による皮なめし具」の4語は、文化的な要素であって、どちらか一方から他方への（もしくは第三の言語からの）借用の可能性も考えられる。

なお Avrorin and Lebedeva (1968)によれば、「男性（一般）」を示す語は *xusə* だが、この語の複数形は「女性（一般）」を指す語と同様不規則で、規則的な **xusə-sə(g)* とはならず、*xusə-nta* であるという。III 群の言語の語頭の *x-* は I, II 群では消失したので、この語は III 群の言語からの借用である。ウデヘ語の「男性（一般）」を示す語は *nii-nta* で、この不規則な複数形はやはりオロチ語と対応する。このように III 群の要素と II 群の要素のいわばハイブリッドのような語形が見出されることから、オロチ語の混合的な性格を窺うことができる。

5.2. III 群の言語からオロチ語に入ったと考えられるもの

他方、III 群の言語からオロチ語が借用したと考えられる語はかなり多く存在する。オロチ語とウデヘ語においては、1 節でみたように、**r* の脱落、語頭の **p- > x-*、語中の **-p- > -w-*、語頭の **x- > ø-*、語中の **-mb- > -m-*、**-nd- > -n-*、**-ŋg- > -ŋ-* などの変化が起きたが、III 群の言語では祖語におけるこれらの音を保存しているため、明らかな借用語を多く確定することができる。

さらにいくつかの語では、同じ III 群の言語からの借用でも、ナーナイ語から入ったものか、ウルチャ語から入ったものかを確定することができるものもあった。ここではウルチャ語から入ったと考えられる語をいくつかあげておく。

表 4: ウルチャ語からオロチ語に入ったと考えられる要素

意味	オロチ語	ウデヘ語	III 群の言語におけるその意味の語
なぞなぞ	<i>gangajə</i>	<i>nagbujku</i>	(Na) <i>naambokaan</i> (Ul) <i>gangau</i>
小指	<i>gangajoku</i>	<i>čimča'a</i>	(Na) <i>gaikoan</i> (Ul) <i>gangaku</i>

だめ (だ)	bajbaj		(Na) ačaasi (Ul) baibar
働く	dəŋsi-	ətətə-	(Na) jobo- (Ul) dəŋsi-
～語で話す	...da-	...məji V	(Na) ... xəsəjiəni V (Ul) ...da-

これまでオロチ語への影響は多くナーナイ語からのものと考えられてきたが、ウルチャ語からの影響も考える必要があることがわかる。ただし、ナーナイ語文語の基礎となっているナイヒン方言とナーナイ語下流方言には異なりがあるので、この点に注意する必要がある。すなわち、上に示したような語は、ウルチャ語から入ったのではなく、ナーナイ語下流方言から入った可能性もある。この点を明らかにするためには、ナーナイ語下流方言の今後の研究の進展を必要とする。

6. まとめと今後の課題

最初に見たように、音対応のみから考えるならば、ウデヘ語とオロチ語はまず他の言語群から分岐し、II 群を形成し、しかるのちに個々の言語に分かれたことに問題はないように見える。

しかし、本稿で行ったように、文法面と語彙面からその要素を一つ一つ検討していくと、両者はそれほど大きくは類似していないことがわかる。少なくとも III 群の三つの言語（ナーナイ、ウルチャ、ウイルタ）が互いによく似ていて、連続的な様相を呈しているのに比べると、両者はかなり大きく異なっているといえる。その原因には、以下の三つの原因が考えられる。

- ・オロチ語が分岐後に III 群の言語（ナーナイ語、ウルチャ語）から大きな影響を受けたこと。
- ・ウデヘ語が独自の音変化を多く起こし、その結果、区別がしにくくなった語彙を大きく入れ替えたこと。
- ・ウデヘ語が漢語、もしくは何らかの別の言語の影響を受けて大きく変容したこと。

これらの要因によって生じた違いをていねいに選り分けることによって、II 群の言語の分岐・発展の歴史を解明していくことが今後の課題である。

参考文献

- Avrorin, V. A. and E. P. Lebedeva 1966. *Orochskie skazki i mify*, AN SSSR, Novosibirsk.
- _____ 1968. *Orochskij jazyk, Jazyki narodov SSSR* 5, Leningrad: AN SSSR.
- _____ 1978. *Orochskie teksty i slovar'*, AN SSSR, Leningrad.
- Avrorin, V. A. and B. V. Boldyrev 2001. *Grammatika orochskogo jazyka*, Rossijskaja akademija nauk sibirskoe otdelenie institut filologii, Novosibirsk izd. so ran.
- Ikegami, J. 1974. Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprachen, *Sprache, Geschichte und Kultur der altaischen Völker*, Berlin: Akademie-Verlag, pp.271-2.
- Kazama, S 2003. *Basic Vocabulary (A) of Tungusic Languages* (Publications on Tungus Languages and Cultures 25), ELPR, A2-037
- Lebedeva, E. P. 1997. *Orochskij jazyk, Jazyki mira: mongol'skie jazyki, tunguso-man'chzhurskie jazyki, japonskij jazyk, korejskij jazyk*: pp. 215-226. Moskva: Izdatel'stvo INDRIK.
- Tsintsius, V. I. 1949. Oчерk morfologii orochskogo jazyka, *Uchenie zapiski LGU, No. 38* (Serija vostokovedcheskikh nauk, vyp. 1, Leningrad.
- Tsintsius, V. I. i dr. 1975. [tom 1], 1977. [tom 2]. *Sravnitel'nyj slovar' tunguso-man'chzhurskikh jazykov, Materialy k etimologicheskomu slovarju*, Nauka, Leningrad.
- 池上二良 1989. 「東北アジアの土着言語とその分布」, 三上次男・神田信夫編『民族の世界史3 東北アジアの民族と歴史』山川出版社, pp. 125-161 [池上二良 2004. 『北方言語叢考』, 北海道大学図書刊行会に再録, pp. 15-47]
- 風間伸次郎 1996. 『オロチ語基礎資料』, ツングース言語文化論集7, 鳥取大学教育学部

On the diversity between Orochi and Udihe

Shinjiro KAZAMA

This paper aims to examine the historical development of two Tungusic languages which belong to the Group II, i.e. Orochi and Udihe, with a particular focus on how they split and came to show divergence among each other. The discussion will mainly rest on grammatical and lexical aspects of these two languages.

Sound correspondences suggest a hypothesis on the languages of Group I and Group II where the proto-language split into Group I and Group II, which then split into Orochi and Udihe. This study tried to reveal that this hypothesis is plausible in terms of grammatical as well as lexical aspects.

1. Introduction
2. Notes on previous works
3. Genetical position of Orochi in Tungusic languages on sound correspondences
4. Grammatical similarities and differences
 - 4.1. Similar elements
 - 4.2. Different elements
5. Lexical similarities and differences
 - 5.1. Inherent elements in Orochi and Udihe
 - 5.2. Lexemes of the Group III into Orochi language
6. Concluding remarks